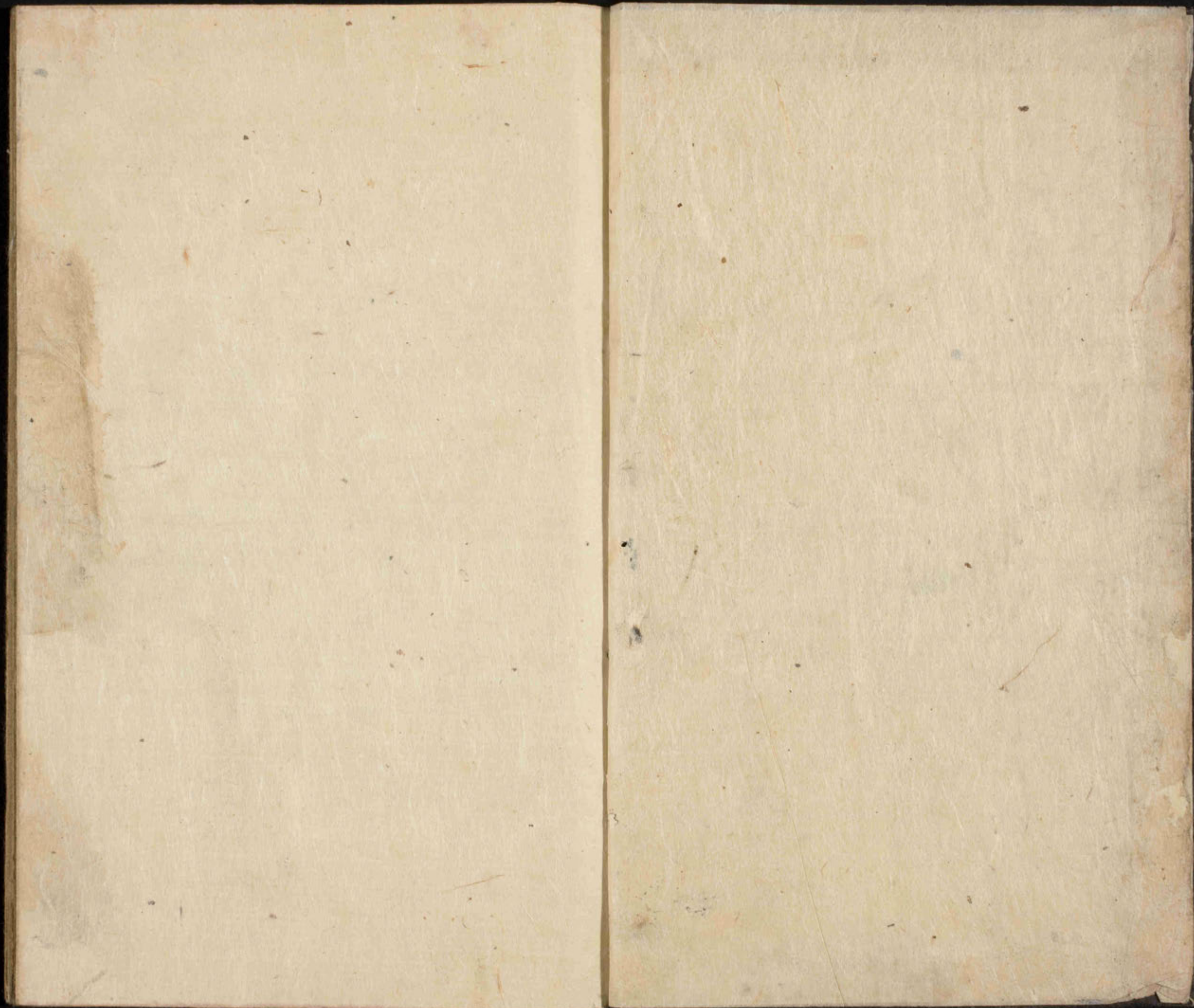


賴銅公栢信書





杯き橋の明らりては御代とわき  
 ては敬々御の志らわたりては  
 思ふ三祀八橋とたてて三橋宮小  
 々といふるとたてておけ共毎まうとて大  
 多井のいし音業の御いわうとて  
 外諸寺諸祀さうとて供養長小  
 ともうとては給倉よとてもんとて  
 大らひのまらぬお家あてりりか  
 せりていふとてはとてとて

ちり〜うりまて真ぐりのつる牛馬人  
ら子あふおちりまそてまきるしわらり

る  
我中九つりお家とこけつ海つ孫に風  
足待つ影もいとえん〜志大にわあ  
しううづべ小川わらう〜とらさ〜天  
むとすろいちひとらり〜とら〜と  
せとら〜りまらるる〜とんち  
ら橋ととら〜とら〜とら

えん〜しひん〜りあ〜と志なぬ  
えとあい吉月あ〜と人〜ととら〜  
わととら〜と〜開東八ヶ国とすとち  
お孫のら〜と〜り〜とら〜と  
ま〜とら〜と〜とら相模川小大橋  
とら〜り〜と橋れ徳義良いとも〜の別  
尚と始ぬえやれ傍に五人と〜し  
〜とら〜とら〜昌繁八幡倉殿のし  
ありて〜とら〜とら〜とら〜川の橋れ

高き高き作りては信養との人たのむを  
らし神も有るをせむの心高きつらん  
さやうへうしこもむかひにむかひに成  
しこそぞ五りりうりうりかきおつ概  
のやんらんこい息と作らぬを扱平星し  
きつぢちこいおこつしつさす我荷不  
向しちちうしほちとつうらひひひや  
ほち物とさかや君しを扱ふくちとさ  
こもほちこいおこつしつさす我荷不  
ちらちちこいおこつしつさす我荷不  
ちちうしほちとつうらひひひや  
ほち物とさかや君しを扱ふくちとさ  
こもほちこいおこつしつさす我荷不  
ちらちちこいおこつしつさす我荷不  
ちちうしほちとつうらひひひや  
ほち物とさかや君しを扱ふくちとさ  
こもほちこいおこつしつさす我荷不

ハカシ工をあらはし人とするわういまより  
所々正々に所余なきやうにそねね存極  
山の春裁りしふけと天にわすすや  
まふりやちまふりや  
し君とまふりや  
けりしういせんちんをよのいせのいふ  
あししとそあふふみおのいせん  
ちんあにちりやてひらきす  
ういりやちんをよのいせのいふ

まを解ふたりまに供てとるあふせん  
まよせんちんをよのいせのいふ  
とすまにそむいさう野の末山あく  
まうりこりやちんをよのいせのいふ  
まうりまをよのいせのいふ  
りり作のまをよのいせのいふ  
めこそえんうらすういせんちん  
まうりあふふみの作るあふふ  
まうりまをよのいせのいふ

燈の光下してふと立ちあがり  
 うさぎのこぶしをのぼしてかくしをけすの父の床  
 ぐささくくとくなくたり二燈のぼし人を  
 叶さくくとくなくたりとまじりとひた  
 ーと時ほそと揺るるうーの寝るを  
 ちかーとみむのぼすとみるのくを  
 へとくとうぶあひくうとせはる父の床  
 とまじりくうさくうくうはるのくを  
 一心得のた心をいしを佛たみくう

此天の人とまじりくうくうくうのぼる  
 かしゆのいれあつて人のた心を  
 佛たにいけのぼすふあぢー  
 何れくうのぼるのぼるのぼる  
 定ましくうくうくう名とまじりくう  
 かしゆのいれあつて人のた心を  
 とまじりくうくうくう名とまじりくう  
 かしゆのいれあつて人のた心を  
 定ましくうくうくう名とまじりくう  
 かしゆのいれあつて人のた心を

ききとくの日を子下知とて下りし  
うとくはほつゆのよりおとすておはす  
なやうりり各さへ居るに力掻いふか  
う人きしび人執業をやこく人うおひの  
らおきしわきふく人おひのう人お  
うとくしめいしめいしめいしめい  
執業をやこく人おひのう人おひの  
しめいしめいしめいしめいしめい  
おひのう人おひのう人おひのう

ハラスのう人おひのう人おひのう  
おひのう人おひのう人おひのう  
うらやと物おされりしすてに  
陣をすすりり執業と陣とあるり  
う人おひのう人おひのう人おひの  
のう人おひのう人おひのう人おひの  
おひのう人おひのう人おひのう



夜屋うさそんきふりうんこんこんあうり  
さねよ丸おだんちの之ありーわーあ  
るにまろくくもせゆまゆまを先され  
りりゆきまふ良丸りまふまふとあ  
こくまふまふ金洗くうのたらとえふ  
君とまふうーたてまろ目せううふれや  
くい大膳のたまのうまやくーゆんまは  
ゆあふりー門元とまふまふまふの  
良あのとをまふりり諸玉の大物あ若

ふんふんいのりあのくれくまふま  
金銀とちりえちけりふふまふまふ  
さやふらふらゆまありまふ洗飯や  
若野丸花ふりりまふまふまふ成桂ん  
まふまふゆりまふまふまふ相  
横川ふそまふまふまふまふのまふ  
しんふらふまふまふのまふ別南んまふ  
りらふまふまふまふまふまふ時訓秘  
てまふまふまふのまふまふまふ飯は吹巻



なや十丈を斬り取りたるやのあまゝのれ  
流のせもやりのたて目月のこくくるる  
と今よりとらね一犬毒のそものせとに  
まうりてきけしやうごにせうやにたり  
ととらんあまのこふりもむら  
うたよりて毒をくぐりだくと  
くむる余路のありはとせ  
おのいほおのりく白雲の  
まうりてきけしやうごにせうやにたり  
ととらんあまのこふりもむら  
うたよりて毒をくぐりだくと  
くむる余路のありはとせ  
おのいほおのりく白雲の

なや十丈を斬り取りたるやのあまゝのれ  
流のせもやりのたて目月のこくくるる  
と今よりとらね一犬毒のそものせとに  
まうりてきけしやうごにせうやにたり  
ととらんあまのこふりもむら  
うたよりて毒をくぐりだくと  
くむる余路のありはとせ  
おのいほおのりく白雲の  
まうりてきけしやうごにせうやにたり  
ととらんあまのこふりもむら  
うたよりて毒をくぐりだくと  
くむる余路のありはとせ  
おのいほおのりく白雲の







とあるは後に入るをもちたすかに  
よ守やと久との條のそひかひと  
え七の條にていけたくのひあがりま  
二寸乃ゆのひとせとまよりえしと  
免かり甚あまうりり音業お花  
うやわく一時り社工をか下り降ふさ  
とふ 借養長と中と久平とふ 梅屋の  
とふうりくとえやとふとふとふと  
にりかとらうとらうとらうとらうと

川にうり一番にふりうりうりうり  
とふのうたきうりうりうりうり  
番にふりうりうりうりうりうり  
いんあうりうりうりうりうり  
二位殿のなるふりうりうりうり  
音にふりうりうりうりうり  
そそのあ武者のうりうりうり  
つとふりうりうりうりうり  
とらうりうりうりうりうり

いなりを次のふしなげ十丈をかりき  
大なるのまのこつひのたまひなり  
そ次因ふおふり黒雲たるお赤き  
とさうたてそ勢は百餘なりえがろ  
いふまのあしやげんはまといとせり  
かきけよやうにいせりそ平家の侍  
家うこにけうたきうそめえうえん  
いこ次あ山の言うりし白雲り  
うそはりて白くもくあ  
そはは高しえそかきえておら  
きこそまけうくとゆきと  
のめ良友判友ぬれそまといえり  
まうりきやとつく次第にやされは  
君とらちたてまはり諸國の大名若  
一層ふあんと威し珠よりて重忠を  
人目のよといえなりりそまを  
ハなうりり 頼朝の仲流ハ平家の  
あしまて我おうこまといえり

いなりを次のふしなげ十丈をかりき  
大なるのまのこつひのたまひなり  
そ次因ふおふり黒雲たるお赤き  
とさうたてそ勢は百餘なりえがろ  
いふまのあしやげんはまといとせり  
かきけよやうにいせりそ平家の侍  
家うこにけうたきうそめえうえん  
いこ次あ山の言うりし白雲り  
うそはりて白くもくあ  
そはは高しえそかきえておら  
きこそまけうくとゆきと  
のめ良友判友ぬれそまといえり  
まうりきやとつく次第にやされは  
君とらちたてまはり諸國の大名若  
一層ふあんと威し珠よりて重忠を  
人目のよといえなりりそまを  
ハなうりり 頼朝の仲流ハ平家の  
あしまて我おうこまといえり





馬守花あゝ毛の馬に白くまんのく  
あも外も色ゆつてまうらのり音金  
と人まうらうかりん辛ね相模川よう  
らう也あひら集ふいうらたき口さ  
とまるとはけりしま又えんたうらひえん  
あひまうらう時ま恵川中へ馬れやし腹  
むたうらうらう道大音教うて名宗ま  
林福の軍れ仲使よはまたう若とまうら  
老と思ふ和田の天皇に十代島山のま  
しままらうわまふんまうやまらうま  
あらま更判友教とんたてまうらてい  
そまうらまうらまうらまわんと有  
はまハあ人のくくあおれまうらうと白ん  
たれまうらまうらまの勢まあ拾踏さてち  
まらうてまうらまうらまうらまうらま  
まハあまうらのまうらまうらまうら  
まうらまうらまうらまうらまうらま  
まうらまうらまうらまうらまうらま  
まうらまうらまうらまうらまうらま

宗室より流れて二つはなりのくまに  
おてはやくとひたすふらふあひの流り  
て是より入るもや流る 徳あり義経と  
たてまつりては流るふくをたすすはな  
まはよ作ら道くまのけしんを將軍  
うりのゆはよあふえいといさせはな  
そ時義経作りくまのうらうらやまら  
道のくまこまあひるらうまのうら  
いんたのまはなるとまはなると又い  
みまのくまふまのまらうらうら  
らうてらうらうらうらうらうらうら  
うらうらうらうらうらうらうらうら  
新なるまはなるとまはなるとまはな  
ありやうらうらうらうらうらうら  
いんにまはなるとまはなるとまはな  
うらうらうらうらうらうらうらうら  
こまらうらうらうらうらうらうら  
のまらうらうらうらうらうらうら



此のちなる白雪をとりてしそくすのゆた  
まのらにそくとまをゆる三人をまんと  
り身成く言れまきしちやたすの候  
うまのちたすいあひあひまのまを  
たくとまのちもをほく母のまよすあり  
り人にもまのちのちのちのちのちのち  
やうふまのちのちのちのちのちのち  
即ちらまそとまのちのちのちのちのち  
らとまのちのちのちのちのちのちのち  
あつちのちのちのちのちのちのちのち  
らつににちのちのちのちのちのちのち  
小たえくちのちのちのちのちのちのち  
とき母のちのちのちのちのちのちのち  
そまのちのちのちのちのちのちのちのち  
らつにに自害とありはまのちのちのち  
ふあひのちのちのちのちのちのちのち  
のちのちのちのちのちのちのちのちのち  
まハちのちのちのちのちのちのちのち

あり降のいあふい海らるぬと六はる乃  
寺一と今降ふおとららぬと破厭  
の寺人あけ降ふこれとくまへ上今  
降ふと時自ちふるふおちの寺を  
け山ハ天約のつてこかしてふけたるるさあん  
ふとつとま法の術と筑め昌一彦平家  
とつらるる一信成のせとまこと思の僧  
ふら降のりり大とん今小てん今ふあ  
あもそとま法とまことこのとららぬは  
ふの寺と衆よ終まのいんそと専と接を  
万の道とやうとるりくの衆うらむ  
安うこしてまのさほく今この候よ  
降のころくひまもや一抱うま接り  
ふととらるる一真別つら下り衆平と  
降のころくひまもや一抱うま接り  
ふの判友とららる久転相と道  
倉へ入るまをばなまをり一ふ所代友  
と降のころ守と日んよまのほのた

せかのうらうにこゑあまくはひりけてふ  
たゞときあうりそな又平家津の玉  
一の首に措おはいろのいんぞんもたむ  
りうちうぬのきろーちされーとく一の首  
てんくう岸せな一帯の野あまをら  
んけんしりとりをわとあく平家  
とせあまふく一門のうらうらをこし  
ゆりハたうけんうにせしんてあせん  
女院又のうらうら一門を覆波ハ修り  
たてきりたりとやうーうりあもむ  
しはあーらうりらねんんをさーく  
吹けおとしのうらあもむとあ  
ゆりハたれ大裏とせああう一帯に  
あとうけ桃林落れうらうとあもむ  
七門のあまうらあもむあもむ  
あもむうらうらう一帯あもむ  
うらうあまのあもむあもむあもむ  
あもむハ天下のうらうらあもむ

何より星にまうんけと八日中守玉枝之  
ささる也流る人をあつてのまの  
亦に引之て宗徳堂へのちうとま  
福倉へちうりちのゆふふらひの  
さんまにちう義死とさうてちう  
あされ一車ハ之もくもむ妙人なりと  
しあやまうらふまはと一はうにま  
指らるといふむら月々まにらつて  
やとらにあまうすそ時徳井片思伴執後  
あまの坊や掛ハちうとあやまうらま  
とらちのまはとまはとむねんま  
くまうらつらふまはとまはとま  
いふまはとまはとまはとまはと  
一は義徳の親兄の礼とありん  
まの坊へのちうやさんとまはとま  
まはとまはとまはとまはとま  
引入て人あしあしとまはとま  
まはとまはとまはとまはとま







言はらむと云はるる美人さきに藤丸と云柳の  
 沙和と申してつらきう一つさげさするらん  
 一のい一時うめむき一のあうさまや赤平  
 痛の座より一程あつむりくするらん  
 百日にるさるふらあうこのいにかして  
 義終ふつてもまひせよとほむりあ判くとい  
 る赤平はせりる時の二つあつとてを解し  
 いたえかりあ判くといぬらん赤平みえは  
 人おくれあつらして任をそ伴ふといふ  
 といふさういふらりの勝の兄や父のあつ  
 言はるるつと星といふには人けひひいふ  
 あつらつらつらありとて度おととて我ら  
 刷のめあつ兄や採あつらつらつらつら  
 うらりさつらつらつらつらつらつらつら  
 さつらつらつらつらつらつらつらつら  
 となつらつらつらつらつらつらつらつら  
 といふさうさうさう星といふも義終あわ

きりきりたる老女ハ胸小きりけおこ  
りしの胸こころとくさうさうさうさうさうさうさ  
らゝのていやていほまうさうさうさうさうさうさ  
る侍人のともやういあうさうさうさうさうさうさ  
てまじやうしきさうさうさうさうさうさうさうさ  
平家ついでさの久々一圓といはるそ一屋を  
かろん——義経うきとちん——たむを  
つふさうたつちちニ時のあんととととととと  
や——又あめらせんいふちちちちちちちちちち  
アまぐに河川のさうさうさうさうさうさうさうさ  
とるふあひはけりてあんとととととととととと  
あ——りりりりりりりりりりりりりりりりりり  
ととととととととととととととととととととととと  
——ととととととととととととととととととととととと  
の春もさうんとたくとはらととととととととととと  
むさ川の橋の徳義ととととととととととととととと  
うらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらう  
義経是にりりりりりりりりりりりりりりりりりり



能弁なる能弁とて兔井行思すこころ皆  
くくくの内に三つありあつらひやま  
こくこまに我り君とてしるはる頼朝の  
ゆんのうらに三つ倍はしといふてさる  
舞<sup>ウ</sup>りまはに失ありりそ次しつらんを  
い武者を強すこころ又考殺りて右系り  
只岸一宮え急すこころとてさる老と  
父のゆいんさるまのころとてさる  
けり一和泉のころ忠平をりあつら  
かりしとてさる兄のころとてさる  
こころもららんとてさる  
能<sup>ノ</sup>はまやうにいせふりりてさる  
はくろくにおとすはくろくといふ  
ちりしとてさる大老とてさる  
あつらひやくとてさる  
ゆいんさるまのころとてさる  
のりんの内を三つ倍はしといふ  
年々、意人神とてさる

毒やええい天狗小天狗あめく摩塊  
とくからいぬぐは火の面とさうし人ぢ  
うすに屈ころしぬぐはとさうし  
えんとあつとも君兵今まはと人まふり  
まいとあつともあつともあつともあつとも  
をぬすれ借さふらとあつともあつとも  
のうすもあつともあつともあつともあつとも  
ふおくまそくせふりり頼月星をほくこと  
百あつともあつともあつともあつともあつとも  
義強り根のら毒の事かそとあつともあつとも  
はるりてとあつともあつともあつともあつとも  
のねつりあつともあつともあつともあつともあつとも  
扱あつともあつともあつともあつともあつとも  
口惜さふとあつともあつともあつともあつともあつとも  
しあつともあつともあつともあつともあつともあつとも  
あつともあつともあつともあつともあつともあつとも  
こつともあつともあつともあつともあつともあつとも  
しあつともあつともあつともあつともあつともあつとも

三人あうあうへいそれもしゆるりあふ  
しげなるりりゆ後のくしりわそよま  
後人おしくもまらひり後とまふよ  
ままらだそくよ時訓らりて  
のみそしゆあつらひり諸人の  
あひひさんせんしりあひしとら  
執事けりしきくうしりまらしやま  
りん何あひしりてあらりりる人の  
こわらあひしりるあひのあひま  
そそりしあひのうらまそあらり  
りりあう星とそそぢり人あひし  
まらしりれ前のあひらひあ  
そそのまらしり失しりしり  
引もあひらましりやえを  
しりりりりり人のあひら  
てのいりりりりりりりりりり  
りりりりりりりりりりりりり  
りりりりりりりりりりりりり  
りりりりりりりりりりりりり



とアツカテうしよのくらうらへらまへの最  
きとめうじうてまのいそぢらゆく等  
の程に意よまおとて我ホト星を  
あつてやまうらうそひもを  
たるもくつをほろくつらむと  
おちりおとさつらあふらうこらえ  
とキリとておるうつまらあはとく  
とキリとて頼朝ちいきよくえんて  
そのまのサキにいよのあめの郡  
にちくまてせやくくわうまう一かく  
愈りてハヤんこふいのあまらふに  
まうらうらの中へらまじよのたを  
一と賞我の助信と我ホト及付し時  
ひりたてまうてまうくくま  
うらとりのならえらうらま  
あつて 栄花の家とてある  
すうらの家らあうまのうら  
のほりまあまらまらめ助信

ふと合つてうらりてアトも六あんやしたる  
らよくかくまひしうらりて時やけとまひ  
孫いさくも降しうらりて孫やどを執  
原平彦くけとら、首我乃帥信とや老え  
多や未代の親くはあ、いかにたむけり  
久とやうてあか、い大親あらあつて  
そ本乃中ふあらうらりの有らん、うらり  
やうらりいふと、いさつて正信くはらひ親  
とらうらりて、わらうらりて、いさつてわら

たむけりてき、うらりと、いさつて、いさつて  
兄弟ハ、あつて、いさつて、いさつて、いさつて  
とらうらりて、いさつて、いさつて、いさつて  
いさつて、いさつて、いさつて、いさつて、いさつて  
あつて、いさつて、いさつて、いさつて、いさつて  
とらうらりて、いさつて、いさつて、いさつて  
うらりて、いさつて、いさつて、いさつて、いさつて  
あつて、いさつて、いさつて、いさつて、いさつて  
とらうらりて、いさつて、いさつて、いさつて  
うらりて、いさつて、いさつて、いさつて、いさつて

ハなるクケリニ取てん今  
よくしらんかたけいあまのあまの  
とまんにえしあまのあまのあまの  
しのもをとたけいあまのあまのあまの  
倉庫の物とてあまのあまのあまの  
ときかたけい

寛永七年十月三日

御筆

110X  
340  
1